

「かの平和なる物のひびきは」 明治文学における 都会の色彩と音

著者	ORIGAS Jean-Jacques
雑誌名	日本研究・京都会議 KYOTO CONFERENCE ON JAPANESE STUDIES 1994 ?
巻	.non01-04
ページ	162-168
発行年	1996-03-25
その他のタイトル	"Kano heiwa naru mono no hibiki wa": Meiji bungaku ni okeru tokai no shikisai to oto
URL	http://doi.org/10.15055/00003595

「かの平和なる物のひびきは」

明治文学における都会の色彩と音

Jean-Jacques ORIGAS (National Institute of Oriental Languages and Civilizations)

一 森鷗外『うたかたの記』 明治二十三・八 上

幾頭の獅子の挽ける車の上に、勢よく突立ちたる、女神バツリアの像は、先王ルウドキヒ第一世が此凱旋門に据ゑさせしなりといふ。その下よりルウドキヒ町を左に折れたる處に、トリエント産の大理石にて築きおこしたるおほいへあり。これバツリアの首府に名高き見ものなる美術學校なり。

校長ビロツチイが名は、をちこちに鳴りひゞきて、獨逸の國々はいふもさらなり、新希臘、伊太利、羅馬などよりも、こゝに來りつどへる彫工、畫工數を知らず。口課を畢へて後は、學校の向ひなる、「カツフェエ、ミネルワ」といふ店に入りて、珈琲のみ、酒くみかはしなどしておもひ／＼の戯す。こよひも瓦斯燈の光、半ば開きたる窓に映じて、内には笑ひさゞめく聲聞ゆるをり、かどにきかゝりたる二人あり。

先づ二人が面を撲つはたばこの烟にて、遽に入りたる月には、中なる人を見わきがたし。日は暮れたれど暑き頃なるに、窓悉くあけ放ちはせて、かゝる烟の中に居るも、習となりたるるべし。「エキステルならずや、いつの間にか歸りし。」「なほ死なでありつるよ。」など口々に呼ぶを聞けば、彼諸生はこの群にて、馴染あるものならむ。

「大人氣なしといひけたで聞き玉へ。謝肉^{カーネバル}の祭、はつる日の事なりき。『ビナコテエク』の館出でし時は、雪いま晴れて、街の中道なる並木の枝は、一つ／＼薄き氷にてつくまれたるが、今點ぜし街燈に映じたり。いろ／＼の異様な衣を着て、白く又黒き百眼掛けたる人、群をなして往來し、こゝかしこなる窓には毛氈垂れて、物見としたり。カル、の辻なる『カツフェエ、ロリアン』に入りて見れば、おもひ／＼の假裝色を爭ひ、中に雜りし常の衣もはえある心地す。

少女が側に坐したりし一人は、「われをもすさめ玉はむや、」といひて、右手さしのべて少女が腰をかき抱きつ。少女は「さても禮儀知らずの糺子どもかな、汝等にふさはしき接吻のしかたこそあれ。」と叫び、ふりほどきて突立ち、美しき目よりは稲妻出づと思ふばかり、しばし一座を睨みつ。巨勢は唯呆れに呆れて見居たりしが、この時の少女が姿は、蓮花うりにも似ず、「ロオリライ」にも似ず、さながら凱旋門上のパワリアなりと思はれぬ。

少女は誰が飲みほしけむ珈琲碗に添へたりし「コップ」を取りて、中なる水を口に銜むと見えしが、唯一嘆。「糺子よ、糺子よ、汝等誰か美術の糺子ならざる。フィレンチエ派學ぶはミケランジェロ、モンチイが幽霊、和蘭派學ぶはルウベンス、フアン・ヂイクが幽霊、我國のアルブレヒト・デュウレル學びたりとも、アルブレヒト・デュウレルが幽霊ならぬは稀ならむ。會堂に掛けたる『スツディ』二つ三つ、直段好く賣れたる曉には、われらは七星われらは十傑、われらは十二使徒と掟に見たてしてのわれぼめ。かゝるえり屑にミネルワの唇いかで觸れむや。わが冷たき接吻にて、満足せよ。」とぞ叫びける。

噴掛けし霧の下なる此演説、巨勢は何事とも辨へねど、時の繪畫をいやしめたる、諷刺ならむとのみは推測りて、その面を打仰ぐに、女神パワリアに似たりとおもひし威嚴少しもくづれず、言畢りて卓の上におきたりし手袋の酒に濡れたるを取りて、太股にあゆみて出でゆかむとす。

下

定なき空に雨歇みて、學校の庭の木立のゆるげるのみ空りし意の硝子をとほして見ゆ。

國王の棲めりといふベルヒ城の下に來し頃は、雨彌々劇しくなりて、湖水のかたを見わたせば、吹寄する風一陣々、濃淡の堅縞おり出して、濃き處には雨白く、淡き處には風黒し。

日もはや暮れて、岸には「アイヘン」、「エルレン」などの枝繁りあひ廣がりて、水は入江の形をなし、蘆にまじりたる水草に、白き花の咲きたるが、ゆふ闇にほの見えたり。

時は耶蘇曆千八百八十六年六月十三日の夕の七時、パワリア王ルウドキヒ第二世は、湖水に溺れて殞せられしに、年老いたる侍醫グツデンこれを救はむとて、共に命を殞し、顔に王の爪痕を留めて死したりといふ、おそろしき知らせに、翌十四日ミュンヘン府の騒動はおほかたならず。街の角々には黒縁取りたる張紙に、此計畫を書きたるありて、その下には人の山をなしたり。新聞號外には、主の屍見出だしつるをりの摸様に、さまざまの臆説附けて賣るを、人々争ひて買ふ。點呼に應ずる兵卒の正服つけて、黒き毛植ゑたるパワリア蓑戴ける、警察吏の馬に騎り、または徒立にて馳せちがひたるなど、雜沓いはんかたなし。

公園の片隅に通り掛、人を相手に演説をして居る者がある。向ふから来た笠形の尖つた帽子を被づいて古ぼけた外套を猫背に着た爺さんがそこへ歩みを作めて演説者を見る。演説者はびたりと演説をやめてつか／＼と此村夫子のたゞすめる前に出て来る。二人の視線がひたと行き當る。演説者は濁りたる田舎馴子にて御前はカーライルぢやないかと問ふ。如何にもわしはカーライルぢやと村夫子が答へる。チニルシの哲人と人が言辯するのは御前の事かと問ふ。成程世間ではわしの事をチニルシの哲人と云ふ様ぢや。セージと三ふは鳥の名だに、人間のセージとは珍らしいと演説者はから／＼と笑ふ。村夫子は成程猫も杓子も同じ人間ぢやのに殊更に哲人環と異名をつけるのは、あれは鳥ぢやと運名すると同じ様なものだのう。人間は矢張り當り前の人間で善かりさうなものだのに。と答へて是もから／＼と笑ふ。

余は晚餐前に公園を散歩する度に川縁の椅子に腰を卸して向側を眺める。倫敦に固有なる邊霧は殊に岸邊に多い。余が櫻の杖に願を交へて真正面を見て居ると、遙かに對岸の往來を遣ひ廻る霧の影は次第に濃くなつて三階立の町屋の下から漸々此披露くものゝ雲に薄れ去つて来る。仕舞には遠き未來の世を眼前に引き出したる様に突然たる空の中に取り留のつかぬ藍色の影が残る。其時此藍色の奥にぼたり／＼と鈍き光りが滴る様に見え初める。三層四層五層共に瓦斯を點じたのである。

毎日の様に川を隔てゝ霧の中にチニルシーを眺めた余はある朝遂に橋を渡つて其有名な庵りを叩いた。庵りといふと物寂びた感じがある。少なくとも酒とか風流とかいふ念と伴ふ。然しカーライルの庵はそんな脂っこい華密なものではない。往來から直ちに戸が蹴ける程の道傍に建てられた四階造の眞四角な家である。

出張つた所も引き込んだ所もないのべつに眞直に立つて居る。丸で大製造場の煙突の根本を切つてきて之に天井を張つて窓をつけた様に見える。

カーライル云ふ。彼の窓より見渡せば見ゆるものは茂る葉の木株、碧りなる野原、及びその間に點綴する勾配の急なる赤き屋根のみ。西風の吹く此頃の眺めはいと晴れやかに心地よし。

余は茂る葉を見様と思ひ、青き野を眺め様と思ふて實は彼の窓から首を出したのである。首は既に二返折り出したが青いものも何にも見えぬ。右に家が見える。左りに家が見える。向にも家が見える。其上には鉛色の空が一面に胃病やみの様に不精無精に垂れかゝつて居るのみである。余は首を縮めて窓より中へ引き込めた。

カーライル又云ふ倫敦の方を見れば眼に入るものは
エストミンスター、アベルとセント、ポールズの高塔の
頂きのみ。其他幻の如き殿宇は煤を含む雲の影の去
るに任せて隠見す。

「倫敦の方」とは既に時代後れの話である。今日チ
エルシーに来て倫敦の方を見るのは家の中に坐つて家
の方を見ると同じ理窟で、自分の眼で自分の見當を眺
めると云ふのと大した差違はない。然しカーライルは
自ら倫敦に住んで居るとは思はなかつたのである。彼
は田舎に閑居して部の中央にある大伽藍を遙かに眺め
た積りであつた。余は三度び首を出した。そして彼の
所謂「倫敦の方」へと視線を延ばした。然しエストミ
ンスターも見えぬ、セント、ポールズも見えぬ。數萬
の家、數十萬の人、數百萬の物音は余と堂宇との間に
立ちつゝある、迷ひつゝある、動きつゝある。

カーライルは何の爲に此天に近き一室の經營に苦心
したか。彼は彼の文章の示す如く電光石火の人であつた。
彼の韻辭は彼の身邊を圍繞して無遠慮に起る音響を無
心に聞き流して著作に耽るの餘裕を與へなかつたと見
える。洋琴の聲、犬の聲、鶏の聲、鵲の聲、一切の
聲は悉く彼の鋭敏なる神經を刺激して懨懨已む能はざ
らしめたる極度に彼をして天に最も近く人に尤も遠ざ
かれる住居を此四階の天井裏に求めしめたのである。

斯の如く豫期せられたる書齋は二千圓の費用にて先
づ／＼思ひ通りに落成を告げて豫期通りの効果を奏し
たが之と同時に思ひ掛けなき障害が又も主人公の耳邊
に起つた。成程洋琴の音もやみ、犬の聲もやみ、鶏の
聲、鵲の聲も案の如く聞えなくなつたが下層に居る
ときは考だに及ばなかつた寺の鐘、汽車の笛聲は何と
も知れず遠きより來る下界の聲が呪の如く彼を追ひか
けて舊の如くに彼の神經を苦しめた。

聲。英國に於てカーライルを苦しめたる聲は獨逸に
於てショペンハウアを苦しめたる聲である。ショペン
ハウア云ふ。「カントは活力論を著せり、余は反つて
活力を弔ふ文を草せんとす。物を打つ音、物を敲く音、
物の轉がる音は皆活力の濫用にして余は之が爲めに日
々苦痛を受ければなり。音響を聞きて何等の感をも起
さざる多數の人我説をきかば笑ふべし。去れど世に理
窟をも感ぜず思想をも感ぜず詩歌をも感ぜず美術をも
感ぜざるものあらば、そは正に此輩なる事を忘るゝ勿
れ。彼等の頭腦の組織は鹿類にして覺り鈍き事其源因
たるは疑ふべからず」カーライルとショペンハウアと
は實に十九世紀の好一對である。余が此の如く回想し
つゝあつた時に例の婆さんがどうです下りませうかと
促がす。

一層を下る毎に下界に近づく様な心持ちがする。冥
想の皮が剥ける如く感ぜらるゝ。階段を降り切つて最
下の欄干に倚つて通りを眺めた時には遂に依然たる一
個の俗人となり了つて仕舞つた。

三 永井荷風 『日和下駄』

大正三・八―四・六『三田文學』掲載

大正四・十一、靱山書店刊

第九 崖

昔から市内の崖には別にこれという名前のついた処は一つもなかったようである。『紫の一本』その他の書にも、窪、谷なぞいう分類はあるが崖という一章は設けられていない。しかし高低の甚しい東京の地勢から考えて、崖は昔も今も変わりなく市中の諸処に聳えていたに相違ない。

小石川春日町から柳町指ヶ谷町へかけての低地から、本郷の高台を見る処々には、電車の開通しない以前、即ち東京市の地勢と風景とがまだ今日ほどに破壊されない頃には、樹や草の生茂った崖が現れていた。根津の低地から弥生ヶ岡と千駄木の高地を仰げばここもまた絶壁である。絶壁の頂に添うて、根津権現の方から団子坂の上へと通ずる一条の路がある。私は東京中の往来の中で、この道ほど興味ある処はないと思っている。片側は樹と竹藪に蔽われて昼なお暗く、片側はわが歩む道さえ崩れ落ちはせぬかと危まれるばかり、足下を覗くと崖の中腹に生えた樹木の梢を透して谷底のような低い処にある人家の屋根が小さく見える。されば向は一面に遮るものなき大空かぎりもなく広々として、自由に浮雲の定めなき行衛をも見極められる。左手には上野谷中に連る森黒く、右手には神田下谷浅草へかけての市街が一目に見附され其処より起る雑然たる巷の物音が距離のために柔げられて、かのヴェルレヌが詩に、
かの平和なる物のひびきは
街より来る……
といったような心持を起させる。

第十 坂

前回記する処の崖といささか重複する嫌いがあるが、市中の坂について少しく述べたい。坂は即ち平地に生じた波瀾である。平坦なる大通は歩いて滑らず躓かず、車を走らせて安全無事、荷物を運ばせて賃銀安しといえども、無聊に苦しむ閑人の散歩には余りに单调に過る。けだし東京市中における眺望の一直線をなす美観は、橋あり舟ある運河の岸においてのみこれを得るが、銀座日本橋の大通の如き平坦なる街路の眺望に至っては、われら不幸にしていまだ泰西の都市において経験したような感興を催さない。西洋の都市においても私は紐育の平坦なるFifth Avenueよりロンビヤの高台に上る石段を好み、巴里の大、通よりも遙にモンマルトルの高台を愛した。里昂にあってはクロワルスの坂道から、手摺れた古い石の欄干を越えて眼下にソオンの河岸通を見下しながら歩いた夏の黄昏をば今だに忘れ得ない。

その頃私は年なお三十に至らず、孤身飄然、異郷にあって更に孤客となるの怨なく、到る処の青山これ墳墓地ともいいたいほど意氣頗衰なるところがあったが今その十年の昔と、髪髪いまだ幸にして霜を戴かざれど精魂漸く衰え聖代の世に男一匹の身を持ってあぐみ為す事もなき苦しさに、江戸絵図を懷中に日和下駄曳摺って、既に狂歌俳句に誦古された江戸名所の跡を弔い歩む感慨とを比較すれば、全くわれながら一滴の涙なきを得ない。さりながら、かの端唄の文句にも、色気ないとして苦にせまい賤が伏家に月もさす。徒に悲み憤って身を破るが如きはけだし賢人のなさざる処。われらが住む東京の都市いかに醜く汚しというとも、ここに住みここに朝夕を送るかぎり、醜き中にも幾分の美を搜り汚き中にもまた何かの趣を見出し、以て気は心とやら、無理やりにも少しは居心地住心地のよいように自ら思いなす処がなければならぬ。これ元來が主意というものなき我が日和下駄の散歩の聊か以て主意とする処ではないか。

偶成

ボオル・ヴェルレエン

空は屋根のかなたに

かくも静にかくも青し。

樹は屋根のかなたに

青き葉をゆする。

打仰ぐ空高く御寺の鐘は

やはらかに鳴る。

打仰ぐ樹の上に鳥は

かなしく歌ふ。

あゝ神よ。質朴なる人生は

かしこなりけり。

かの平和なる物のひびきは

街より来る。

君、過ぎし日に何をかなせし。

君今こゝに唯だ嘆く。

語れや、君、そもわかき折

なにをかなせし。

VI

Le ciel est, par-dessus le toit ¹,
Si bleu, si calme!
Un arbre, par-dessus le toit
Berce sa palme.

4

La cloche dans le ciel qu'on voit
Doucement tinte.
Un oiseau sur l'arbre qu'on voit
Chante sa plainte.

8

Mon Dieu, mon Dieu, la vie est là,
Simple et tranquille.
Cette paisible rumeur-là
Vient de la ville.

12

— Qu'as-tu fait, ô toi que voilà
Pleurant sans cesse,
Dis, qu'as-tu fait, toi que voilà,
De ta jeunesse ?²

16

SAGESSE

VERLAINE. ŒUVRES POÉTIQUES.

金子光晴と上海

劉 建 輝 (南開大学)

LIU Jian Hui

1926年、金子光晴は妻・三千代を携えて上海を訪れる。そこで彼は「私たちのあいだで通用するのとは全く別なモラルがあること」を知り、「むごたらしい」現実を発見する。以後、二回目の上海行とその後の五年間の海外放浪を挟んで彼の詩の世界は大きく変質する。観念的な美意識の殻から抜け出し、現実直視、現実「活写」への転向である。従来の金子論は往々にして詩人のこの変化の理由をそのヨーロッパ体験に求め、ラディカルな自己とエトランジェの目の獲得を指摘する。しかし後年、この時期の海外体験を回想するに際して金子自身も「七年にわたる長旅」と表現しているように、ヨーロッパの前に三回にわたる上海行とそこでの様々な体験が明らかにその後の変化の方向を決定するものとして認識されるべきである。今回の発表は従来きわめて重要だと認識されながらも具体的な考察が疎かにされてきた詩人のこの上海体験について詩集「鱗沈む」、回想録「どくろ杯」などを手がかりに追跡する。そして上海において詩人がどのようにこの「魔都」を受けとめ、またこの特殊な空間との出会いを通じていかにして自分の詩的感覚を観念的デカダンスから感覚的デカダンスへと変貌させたかについて、そのプロセスの解明を試みる。